

全 仏

NO. 220

8 / 51



広宣紙の役割

▼ある宗派の新聞会議において、佐藤智雄中央大教授が、新聞学の立場から「宗門の新聞はきわめて多目的で、性格があいまいで、そのうえページ数が少ないのに盛りこむ内容が多く無理がある。本来は未信徒に読ませ信仰を勧めるのが大きな目的であるから、未信徒への対策をどうすべきかに取材と編集のポイントをしばるべきである」と示唆を与えているが、各宗派とも編集にはご苦労が多いと思われる。

▼全仏においては官報的性格と同時にあくまでも全仏加盟各宗派のよりよき仏教的統一をめざして毎回苦労を重ねて編集をしている。▼今年の大会でも決議されたことだが各県仏の動きをしらせる機関紙なども逐一全仏の方へ提出してくれることを常に願っている。▼一歩前進、二歩後退してはならないと思っている。(A)

写真はグアムで厳修された南太平洋戦没者の33回忌「百僧供養」(二面記事参照)

第9回 日本仏教文化会議

8月25日～26日 箱根で開く

全日本仏教会と国際仏教交流センター（孝道教団）の共催による「日本仏教文化会議」は今年第九回目をむかえる。

毎年熱心なる討議が行なわれているが今年も、基調講演の講師に高橋暁正（東大）、雲井昭善（大谷大）の両先生が決まり、一昨年、昨年に引き続き「人類の未来と仏教」（三回目）のテーマのもと開催されるが、結論がだされるということでは非常に期待されている。

すでに運営委員会なども開かれ、次の要項が発表となった。

「第九回日本仏教文化会議」

「人類の未来と仏教」③要項

テーマ 「人類の未来と仏教」三回目
講演 (A)自然と科学と人間の未来

東京大学講師 高橋暁正氏
(B)仏教的未来社会と仏教徒のライフサイクル

大谷大学教授 雲井昭善氏

期日 八月二十五日、二十六日
会場 箱根・湖尻富士見荘ホテル
日程 第一日（八月二十五日・水）

午前十一時より受付開始
午後一時より開会式

午後一時半より基調講演
午後六時に討議終了し懇親会
第二日（八月二十六日・木）
午前九時より討議—三時まで
午後三時閉会式—解散
主催 (財)全日本仏教会
(財)国際仏教交流センター

アジアの友好と平和

第四回アジア仏教徒平和会議開かる

永き戦禍のなかに漸く祖国の平和回復と独立を達成したベトナム、ラオスの仏教代表をはじめ、スリランカ、タイ、インドなど各国仏教代表者六十余名と日本側仏教者多数が参加して、七月二十六日より二十八日までの三日間、東京・上野の池之端文化センターを会場に「第四回アジア仏教徒平和会議」が開催された。

この会議は第一回を本部のあるモンゴルで開き、ついでスリランカ、インドと開催してきたが、今回日本で開かれたことは、アジアの仏教徒との友好親善を促進するうえでも貴重な大会であった。

後援 読売新聞 社

なお日本仏教文化会議はオフザーパー参加（聴講）が許されておりますので、参加を希望する方は、ホテルの予約上その旨

お早めに申し込み下さい。宿泊費は実費ご負担願います。

昨年度（第二回）の紀要が出来あがりました。ご希望の方は全日本仏教会事務局の文化部にお申し込み下さい。一冊千五百円（送料別）。

インド救ライセンター 移管記念の仏像奉安式

インド政府はこのたび、アジア救ライ協会の多年にわたるインド救ライ事業に感謝して、同協会にお釈迦さまの仏像を寄贈した。

その奉安式が六月二十三日、東京池上の大坊本行寺（日蓮聖人入滅の地）において執行された。式は本行寺の臨終の間において、救ライ協合理事長・上田常隆氏、全日本仏教会事務次長・安藤義祐師、東京仏教連合会会長・栗本俊道師、同事務局局長・郡司博道師、日蓮宗宗務院総務部長・三井宣雄師、その他大森仏教会、池上山内寺院など多数の参列があり盛儀であった。

アジア救ライ協会は一九六二年以来、インドのアグラ市郊外に救ライセンターを設けて、ライ病患者の救済、治療と、その医師、専門技術者の養成にあたってきたが、今年四月その全施設を、インド中央政府に引渡し、今後はインド政府の責任において運営されることになった。

この救ライ事業には、東京都仏教連合会をはじめ、仏教関係の援助が大きく、上田理事長も挨拶の中で「移管式の際に感謝のしるしとして仏像が贈呈されましたが、この心の中には多くの日本人の善意とインド人の感謝がこめられている。とくに仏教関係各位にはお礼申し上げます」と感謝の言葉を述べた。

グアム、サイパンで 33回忌 百僧供養

戦没者慰霊

真言宗智山派では去る六月二十四日から四日間、太平洋戦争の最大の玉碎悲劇が繰り広げられたグアム、サイパンの戦跡を巡回し、戦没者の慰霊法要を各所で行なっていました。なかでも最大の法要は六月二十六日執行されたグアム島ジゴ慰霊公苑での仏教、キリスト教合同による南太平洋戦没者三十三回忌慰霊法要でありました。

この法要は財団法人南太平洋戦没者慰霊協会（理事長 植木光教氏）から智山派に対し委嘱があったもので、一宗を挙げて法要団が派遣されたものであります。

法要団の編成は、総裁に秋山祐雅元化主親下、副総裁に川崎大師平間寺貫首高橋隆天大僧正、顧問に宗務総長別所弘因大僧正を推戴し、元宗務総長上野頼栄大僧正を団長に、小峰順普大僧正、岡本実良本山法務部長を副団長とする智山派一行百十名のメンバーでありました。

ジゴ慰霊公苑は、昭和四十五年南太平洋戦没者慰霊協会が、日米両国の協力で南太平洋全域にわたる日本人戦没者の遺骨を安置し、あわせて当地方で散華した各国すべての犠牲者の霊を慰めようと建設されたもので、この場所はもと又木山

といわれた旧日本軍の司令部跡であり、小畑軍司令官以下千五百余名の将兵が玉砕したところといわれております。小高い丘を背景に、ヤシの林に囲まれた二万坪の静かな所で中央に合掌と十字架を形どったコンクリートの塔が南国の太陽に照らされてがっしりと立ち、その下に黒御影の慰霊碑がひっそりと立っておりました。

時あたかも先の大台風の風速九十メートルという猛風に直撃され壊滅状態のさなか、觀光客全面ストップという事でしたが、カルボ神父と栗田慰霊協会事務局局長を始め、グアム島政府の並々ならぬ御配慮により、二週間の遅れで法要が実現したものです。式場の設営もカルボ神父が中心となり、在留邦人の人達が、テント、机、椅子等準備万端用意してくれました。

遺族百二十名参列

法要は午前九時すぎ炎天下のもと、慰霊協会の方々を始め、日本からの戦没者遺族百二十名、来賓としてボダリオ・グアム島知事、アダ・グアム議会議長、井上グアム島日本人クラブ会長、浜中総領事、石川副総領事など知名士多数が参列

しました。

慰霊碑の前には日本から持参した色とりどりの供物とところせましと供えられ線香のかおり漂う中に、鼓笛隊の演奏により、ホイイスカウトが日・米・グアムの三国旗を掲揚、一分間の黙祷があり、三木首相のメッセージを浜中総領事が代

読。挨拶に立ったボダリオ知事は「戦争の時は少年であったが、国境の別なく日本とグアムが手を取りあって、再び悲しい悲劇を繰り返さぬよう平和を築いていこう。」と述べ、アダ議長は「碑の前にぬかずいて感慨ひとしおであります。この感激を皆様とわかちあい両国の平和を祈りたい。」との言葉があり、ついで智山派管長美蓉良順大僧正親下のメッセージが別所宗務総長によつて代読された。

誦経に入り、秋山大導師は力強い声で「サイパン、グアムに於ける軍官民の玉碎悲劇は今尚国民の心底に新たにして萬解の悲涙を止め得ざる所なり。遺族各位の痛恨察するに余あり。慰霊追悼の法筵をここジゴの戦跡に展べ淨域を結界して群霊を影向せしめ百僧供養の儀礼を以て法要を勤修せん。」との祭文を読みあげ、参列者多数の胸を感動させた。

巖谷協会理事が「日本の繁栄は戦没者の尊いしずえのおかげです。どうか安らかに眠り下さい。」と植木理事長の追悼文を読み、誦経が終わると、秋山大導師作詞「阿字和讃」（怨親一如平和和讃）が唱えられ一段と感涙の涙が頬を濡らした。さらに駒井絹枝さんの追悼の横笛が高く低く戦没者の郷愁を誘うが如

く、五ツ木の子守唄を吹きつづけると一同どつと涙が吹き出し、後の小高い丘の赤茶けた地はだと、台風でめちやくちゃに枯れた木々が何んとなく砲撃の跡を思わせ、当時に帰ったように悲しみがこみあげて来ました。

カソリックのミサはお国柄のアロハシヤツを着た聖歌隊によるコーラスで始まり、印象的な赤紫の服と黒い帽子を被ったカルボ神父が、中国、ベトナム、フィリピンを代表する牧師と共に、慰霊碑に水をかけ、ベルを鳴らしけいけん祈りを捧げました。

カルボ神父は「この塔の建設には微力ながら協力をしましたが、ここに宗派の別なく慰霊祭が行われたことをうれしく思います。」と述べられミサは終了しました。

「友よ我が友」を合唱

最後に南太平洋戦没者に捧げる歌「友よ我が友」の合唱があり、二時間におよぶ法要は終わりました。いつもなら必ず降るスコールもこの時だけ不思議と遠慮していたようだ。

四日間のみじかい滞在であったが、親切で人なつこいグアムの人々の歓待に平和のありがたさをあじわい、各所で見聞する戦跡は戦争の悲惨さをしみじみ感じさせる日々であった。心より戦没者の冥福をお祈り申し上げます。

（中里崇亮記）

仏教的ライフサイクル

第二十四回全日本仏教徒会議三重大会に「仏教的生涯計画をたてよう」という議案が提出され採択された。生命尊厳問題、人口問題などの社会問題から、親と子、青少年教化、老人福祉など含まれる問題は多い。充分研究するため、まず青少年教化活動に力を入れているボーイスカウトをとりあげた。「神仏を敬う心」を養う活動に注目し、力を注がねばならない。

ボーイスカウト

活用こそ使命

花山勝友

ボーイスカウト運動の創始者、イギリスのバーデン・パウエルは

「ゴッドを信せず、ゴッドのみむねに反するものに幸福はない。スカウトは誰でも信教を持つべきである」と述べている。これを受けて世界中のボーイスカウトは、その「ちかい」の第一条に、自国に対する愛とともに、「ゴッド」に対する忠誠をかかげている。

「すべての加盟員が、それぞれの明確な信教を持つことを奨励する」

と、ボーイスカウト日本連盟の規約第十四条にあるのも、「ちかい」の第一条に「私は神（仏）と国とに誠を尽し、おきてを守ります」

とあるのを受けているわけである。

ところが、宗教事情が極めて複雑な日本においては、宗教団体を基盤としていないボーイスカウト団のパーセンテージ

は世界でも最も高く、しかも前掲にあるように

「神（仏）」という、極めてあいまいな表現によって、もわかるように、神と仏との区別すら明確ではなく、おまけに「神」という言葉が、必ずしも欧米におけるゴッド（唯一創造神）を意味しているとは限らないのである。

かくて日本のボーイスカウトにおいては少数の例外を除くと、信教を特に強調することはなく、単なる少年達の生活訓練ないし団体活動の場となってしまうのである。

現在の日本の社会においては、憲法に明記されている「宗教の自由」が、本来ならば「いかなる宗教を信してもよい自由」を優先したものであるはずなのに、いかなる宗教を信じなくてもよい自

由」と解釈されてしまっているために、学校教育において宗教教育を期待することとは殆んど不可能になってしまっているし核家族化に伴って家庭においてすら宗教教育がなされていないのである。

ここに、ボーイスカウトという、個人の自由な意志によって参加することの出来る団体の持つ大きな役割と責任とがある。

宗教に関心を示そうとしない現状の子供たちに対し、宗教的情操教育をほどこすことがいかに大切であるかは、仏教関係者なら、だれしもが痛感していることであろう。

大谷派での現況

堀 秀之

ボーイスカウトの教育規定の中には「すべての加盟員が、それぞれ明確なる信仰をもつことを奨励する」とかかげられている。またスカウトがたてるちかいは「仏（又は神）と国とに誠をつくしおきてを守ります」ということはが第一条にあるのである。人格の向上、健康増進、技能の錬磨、奉仕精神を目標とし、真の人づくりをめざすスカウト教育の基盤にあるものは宗教であるといつて過言ではない、しかし現在の日本においては宗教的習慣や行事は数多くあるが、個々の信仰の問題になると全く無宗教無関心の時代といつてよい現状である。そうし

生涯教育の中でも、人間形成に最も大きな影響を与えるといわれる少年期においてつちかわれた宗教教育が、その子供の一生に、極めて有効であることは間違いない。

寺院活動の中に、青少年活動を取り入れることが必ずしも容易ではない現状から考える時、現実存在するボーイスカウトを十分に活用することは、現在の仏教者にとってなすべき使命とさえ言えることである。一つでも多くの仏教系ボーイスカウト団が結成されることが、心から期待される時期に来ていると信ずる。

（全日仏国際専門委員）

た中でスカウトや指導者がいかに宗教にふれ、宗教を学び、個々の信仰をもつかということとはまことにむずかしい問題なのである。

スカウティングと宗教の問題は、各教宗派においては勿論以前から真剣にとり組んで来た問題であり、私共の大谷派においてもまた然りである。昭和三十七年に篤信のスカウトに授与される宗教章（仏教章、キリスト教章、神道章）が日本連盟で制定されている。スカウトが宗教にふれ、宗教を学び、信仰をもつことを願ってこの宗教章は制定を見たのである。ここで、私共の真宗大谷派におけ

WFB資金案など諮問

宗務総長会・常務理事会

去る七月二十一日午前十時より、京都知恩院和順会館を会場に、全日本仏教会招請による十宗派宗務総長会議を開催。事務総局挨拶、日蓮宗新宗務総長松村寿

頭師の紹介に続き、曹洞宗宗務総長田辺哲摩理事長が推され、座長として懸案の第十二回WFB日本大会開催の要項、予算案等の諮問、協議が行なわれた。

大会趣旨の案文、日程が国際部長より説明され、その目的とするところは、諸外国が日本開催を切望する真意を充分に把握し、実践可能な提議を以て、大乗教

の在り方を内外に誇示、再認識させるもので、資金計画については細部に亘る疑義を正し、字句の解釈に至るまでの質疑応答が行なわれた。結果、加盟団体協力は多少の上下を含めて、凡そ五十一年度負担金の一ヶ年分相当が了承された。

引続き午後、同会場に於て、常務理事会を招集。議長に田辺理事長、別所弘因、松村寿頭面師を議事録署名委員に選出し、以下の日程によって、慎重審議が執り行なわれた。

議案第一号「人事移動について」庶務部長の上程説明により、浄土真宗本願寺派築地本願寺輪番の交替によって、常務理事鎌田靈英師より藤岡義昭師へ、日蓮

宗宗務総長改選に伴ない常務理事渡部公允師より松村寿頭師、評議員三井宣雄師風間田静師より遠藤日護師、藤田教忠師へと、それぞれ残任期間の就任が承認。

議案第二号「第二十四回全日本仏教徒会議採択事項について」組織局長より、各部局の担当が発表され、特に第一部会議案第六号「威力誇示や資金集めに利用される恐れのある葬儀法要は拒否しよう」は組織局長の担当で、関係各宗派、県

仏教会宛、理事長名を以て周知徹底すべく要請依頼状を発送、同時に特定の宗教紙に広告掲載を依頼することで了承。議案第三号「第十二回世界仏教徒会議日本大会開催の件（マスタープランの検討）」国際部長より、要項、内容、日程、予算案の上程説明があり、一部積算上の指摘、行事内容の具体案など説明を求められ、予算案ということ了承。

尚、協力の納入時期・分割額を早期に発表、又この案件については、特に九月初旬を期して、評議員会を招集するよう要望が出された。最後に、事務総局より、来る十月一日を以て、これまでの大会準備世話人会を発展的解消、第十二回WFB大会準備委員会としたい旨発表し、満場一致の了承を得た。

暑中御見舞い申し上げます

総本山 金剛峯寺

高野山真言宗宗務所

座主・管長 高峰 秀海

宗務総長 近藤 本昇

総務部長 橋爪 良恒

教学部長 新居 祐政

財務部長 稲葉 義猛

法会部長 久利 隆幢

山林部長 伊勢木 俊範

企画室長 北川 智城

和歌山県伊都郡高野町高野山
〒643-02 〇七三六五(6)二〇一一

京都嵯峨

大 覚 寺

京都市右京区嵯峨大沢町四
〒615 〇七五(八七二) 〇〇七一一

財団法人

埼玉県佛教会

会 長 興 文丈

副会長 大島 見道

〃 岩崎 鳳栄

浦和市高砂四一三三十八
〒336 〇四八八(6)二二三八

天 台 寺 門 宗

管 長 大岡 俊謙

宗務総長 山本 光照

大津市園城寺町三井寺山内勸学院
〒520 〇七七五(二二) 四八九八

WFB加盟センターの近況

「米国仏教団」盛んな教化運動

WFB加盟の各国センターより、活動報告や仏教事情などが寄せられている。その第二号はサンフランシスコに本部を置く「米国仏教団」を紹介する。(六月に全日本仏教会訪米団も訪問した)

明治32年出張所開設

【沿革】明治三十二年、蘭田、西島の両師が、西本願寺明如上人から派遣されサンフランシスコに本願寺出張所を開設した。このお念仏の種は日本人居住の主要都市を中心に広まっていったが、日米開戦中、日系人の西部沿岸立退きに伴って、一時転地をよぎなくされたが、終戦後は再びサンフランシスコにもどり、名称を米国仏教団と改称した。現在は本部ビルを建て、布教伝道の本拠として活躍している。

【機構】北米大陸内六十の寺院を八教区に分割、その他教線の広い寺院は、それぞれ支部や出張所を設けるなどして活動している。初代より現在まで三百十一名の開教使が登録されている。

なお六十寺院中、五寺院(ロスアンゼルス、フレズノ、サンノゼ、サクラメント、シアトル)は別院、その他は仏教会の名称で登録されている。それぞれの寺

院は日曜学校、仏教青年会、仏教婦人会などの教化運動が盛んであり、日系人社会の有力な団体として社会に貢献している。

【組織】全米の各仏教会から二名宛のナショナルカンシルマンを選出、毎年一回定期総会を開催して仏教団の運営を推進している。また理事制度を設け、諸役員六十名をもって理事会を構成し運営にあたっている。全米駐在の開教使をもって開教使会を構成し、会議・布教研究・教学研究をし、伝道強化に尽している。

大学院や相互扶助会

【事業】仏教大学院「パークレー」に仏教大学院を設置、教学の研鑽と仏教の紹介につとめている。

百万弗財団一開教二十五周年を記念して五十万弗を基金とした北米開教財団が設立されたが、これを百万弗に増額し、目標額に達したのち、利息を開教事業に使用する定款になっている。

相互扶助会一会員一人一口五百弗を単位とした加州公認の相互扶助会を設立、この純益で仏教団運営資金を援助、寺院へ助成金支給、加盟者不幸のとき五百弗が下付される一石三鳥の利益を得る。

成道会シール一成道会にはシールを配布し、浄財を募って資金に充当。その他奨学金制度、文書伝道、仏教徒センサスなど幅広い活動を展開、きたるべき第十二回WFB日本大会には大きな団体をつくって参加を計画しているとのことである。

全日仏役員人事

このたび浄土真宗本願寺派と日蓮宗より役員変更届がだされ、全日本仏教会人事は次の通りとなった。

- | | | | |
|------|------|----|------|
| 鎌田憲英 | 常務理事 | 退任 | 本願寺派 |
| 藤岡義昭 | 常務理事 | 新任 | 日蓮宗 |
| 渡部公允 | 常務理事 | 退任 | 日蓮宗 |
| 松村寿顕 | 常務理事 | 新任 | 日蓮宗 |
| 三井宣雄 | 評議員 | 退任 | 日蓮宗 |
| 風間円静 | 評議員 | 新任 | 日蓮宗 |
| 遠藤日護 | 評議員 | 新任 | 日蓮宗 |
| 藤田教忠 | 評議員 | 新任 | 日蓮宗 |

組織専門委員会開かる

去る七月五日、全仏会議室において組織専門委員会が開催され、左記の事項について審議がなされた。

- 組織専門委員長選出について
任期満了により、桜井大乗師を新専門委員長に選出。
- 第二十四回全仏大会について
三重大会の決議事項、特に黒い法要の問題について審議。
- 第二十五回全仏大会について
明年開催の埼玉大会について審議。開

催期日は明年十月上旬の予定。
△出席者▽新聞、板橋、清水谷、美濃郡司、土持、船口、小林、河野、高辻

事務総局録事(七月)

- 三日 埼玉県佛理事会へ出席
- 五日 組織専門委員会
- 八日 局内会議
- 九日 麻布山継職披露宴出席
- 二十日 埼玉県佛支部長会出席
局内会議
- 二十一日 宗務総長会(和順会館)
- 二十六日 常務理事会(〃〃)
- ABC大会(三日間)

寺院用具

浅草通り五鳳会加盟店

株式会社 決田商店

東京都台東区寿2-10-9 (地下鉄田原町駅前)

電話 代表 (481) 4965

昭和五十一年八月一日発行
八月号 第二二〇号

発行人 鮎正浩
編集人 来馬規雄

発行所 財団法人

全日本仏教会

東京都台東区西浅草一ノ五(東京本願寺内)
電話 〇三(八四三)六三三四一三